第五一冪初音

12
881
23

初音　玉鬘並

巻の名の事　於年　寄　并　詞　をもて号之　細同　尋之

年月を松ふひうまれて　なるへ人に　なる　の初　名きう　ゆよ

源氏世六条の　正月　のもの　のを　仰り　玉鬘　光　聖　年

のことをう　名　ゆへに　紫　の　並　ゆへ

細　御　年　巻　三月　ゆよ　ゆり

年　ものの　の　朝　の　巻　の　ゆ　ゆ　きの　ゆう　ゆ　ゆ　ゆ

行拾

聖人乃れい若葉はこもりぬ梅の花をまぶきに
いりしをそこそこ紀そこ川のすそこに木乃めをうちあつるとのつ
人乃ゆとものゆそこにうみあるうる

元石 霞そこ川末のめを春紙書之 拾家 六条院乃ものあへ
ものゆとこむとこもあるはそこ
をるとそこめんところあはくみをまゆ紙のうちをはこ
ろさ海まゆひそそんもとのもあるまゆをそん

朗詠 庭増ニ氣色賸ニ緑林変容 雖ニ宿雪紀 拾家 もゆて
とこ河はこの数あるぬ梅わうちゆをこにけてあるへ

細 六条院ゆ平生ちくらくをはくしある度のうちをるにま
して年始ハ新年籠ちとやうの始まて引はくろひあん
ところあるゆ

春のおとくれ花の上ゆ三月はこわちてみるへ
いあるゆ乃ゆ

拾 生仏ゆとハ極楽浄土とそう
法花経云梅檀香風悅可衆心一奏 河四土不二 同名
方便 実報 寂光也 細 生仏国極楽也

さしてこにうちをてやもくこにすこるゆ行ゆ乃ゆ
人くをわやうふもくゆ迷るる紙 宗義の初よりあしう出
ゆ乃に対くあいゆり 細 宗とハとは基なるゆ乃に花
まてをるとうあるゆ乃みくハるゆてうちくこをこ
花ゆくゆ夢ちうとそ又人乃うをはくまゆやうに

をきなく位なり行也
姫君の御ゆるみとうせ給ふとて
なりくしうしを作うそくあうさ海まるとう給くめや
ともくとてつきくさてうこたもまあり　姫君

細　御乳母の姫君也

そうあめのいとひしてまちち升かくんとちへとるとうをて
花　歯固（ハカタメ）は元三乃日のうの也　歯をよそひ也　別ようそひとこもよ
めり　歯固はうつひとかくもる絵　高盃（タカツキ）　盃六本に行き
とをくへ一の盃は餅（モチ）大根（コンタチナ）橘（タチバナ）と盛（モル）也　餅ハ白乃史さう
の餅を専用（モハラ）也　元にうもくやそその国乃境山の寺
と添もる也
我とのこせをもちあ乃境まさ紀ちへあ乃影そうう原
大根と境まと云説あり　又椎（アカカホ）と云とも云也　歯固乃

ものを添（カヲ）に具ぶる也可考此説花師説同之
ちとをあ乃をにさる紀年ちのひとくもくもして
古　多世と松みそ元紀ひつる年ちをにもをもんや思へと
細　旧年みもあくもとと年の日中とうて
うれあつひおくあ乃元ちのそき行へ也
うれはつる　果　ちやまあひする也　戯（タワム）也
あところひさるとと使　於女房達の源へ乃法乳の祝也
いとくそる紀ちさうれと　果　餅説と源沙汰とる也
或乃説也
いとをくこれる男つくのひとくもうあみるとのく
思ふことあ乃みちくあくんうもとこさう給うや
水　源氏乃を紀ちとくくをたるくこくさゆに沼を
うをてる紀へる也　細同之　細　源乃仁出ある故也

られとあれどんをうちわらひ行るはるかにうたをやうのも
しめのはうへまゐるなり　宋　ちとあれハ年始乃祝詞也
春詞　日本紀　言吹（コトフキ）　寿詞（コトフキコトフキ）　祝賀之

きんちるあにらひあるも　細　源氏とたくみとの
つろひの時はとうの人也　はるの祝ごの人也　はるの
ゆてそんゆるなとてそうんのうをみとうくしひ行道
於宋　元八中ねの元乃詞也　歯固れはの餅いとはるの玉ゆるを
の所うを禁中へまゐるをんゆう也　別餅鏡ゆ中はハ此の
と酒もとるゆ　於宋　元ハ中ねの元乃詞也　歯固れはの餅いとはるの玉ゆるを
引ゆるなて
を汐聖や鏡乃山鏡とゆれたうくそんゆる元ゆを也ハ
わうゆれいのもを行ゆるのことをとうるとゆあゆ　なのか
とをくへくゆうゆうてゆわさをゆうるゆゆる鏡夕つるは

くくくの　花　苔の高のみとゆてそみゆるゆくゆ元乃はるゆ
とてそゆをひを行道　私乃行ハゆみ行のゆゆうはゆんと
中ねの元ゆ行るゆ也　細同之
ちんさゆ行ゆんゆをてゆくとにひさはくゆうひゆさし行
はうをゆそゆみゆるゆひはあれ　於宋　元春賀同ゆ也はゆ
あうんゆはうくへ源氏の出乃ゆとゆうゆ　細同之
と朝ゆへくゆをそゆれうゆはうゆとうゆやまゆうゆんゆうる
とうゆみゆうゆれんをゆゆんと　於女房ゆう歯固乃ことを
源氏ゆ之ゆ語行てうへみゆ我乃ゆをゆゆんと生ゆに
八源氏乃餅鏡とんゆせゆんゆゆたてゆうゆみく
ゆをゆゆをゆゆハ行ゆる也　細　ゆゆへハ源氏系ゆし
行ゆゆゆるゆれゆはゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
弁　かくの行ゆるのゆゆ也へ

乃てれそるこゝとくこゝもとそてうちまをり〳〵ふそひ宮し給ふ
深
原の宮ふされこゝとくこゝもの給成へ〳〵
落ゆくもぬる池乃鏡みけ世にさゝらひる死る者そあしこゝる
仮
原乃高舞池の鏡さ死奴給てう何そ玉ふ宮れそ池の水
とゝきて鏡のこゝ〳〵原氏と仏ふ上との御中世ふさゝらひる
きは新のうゝ〳〵原と八鏡よりをてうゝ給つる也
河
柳仙蔵腰池の鏡 白氏文集 氷池の波鏡雪新磨成
接
玉の日此新そふ池乃鏡みけ柳のまゆ極う生へそみ〳〵ゆる
をにめてゝ死はあそひゝゝもあり 細 第子地也
ゆるゆる死池乃鏡に美代とゝひゝき新そゝるゝゝけ
仮
黒上高見も舞鏡と池よ死奴給てう心ゝ宮ゝゝり
細
六条池の神也廣大よ而白高也
あふゝゝにつきそをゝきはゝ芸りとあゝゝゝりゝ宮し

うゝ〳〵給ふ 細 ゆゝる池也原と給上とゝ乃行ゝひと云也
ゝゝを海の日あり高ゝをゝ玉ゝをのまゝとゝりてゝゝそゝん
仮
にゝとゝゝゝゝたゝる日あり 元日ゝわりにあひてゝゝゝゝ
引歌
ゝゝ年まゝてゝ死まゝる松もゝゝゝゝゝゝ八玉ゝひまゝて美代やゝん
新古今
ゝゝしきゝゝ世ゝ始乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
侍松根摩腰ゝ年翠満年 朗詠ゝ日
細 元日ゝ月也
姫玉の沸ゝゝにわゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝハゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
仮
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

物うるとまてうれる也

心のおとゝうるとわさとうまゝくまあいあるひきこやうも
うるとこうるとなれ行つり　宗祇石上うるとこうもとこの物語也

へ　ゝ　ゝ　ゝ

えもゝゝ　ゝ　ゝ　

[illegible]

公方のみことのりやとてはかの宮れはかの宮やとて云乃宮ぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

くるぬるをとこ〳〵やうにもてなしたる頃也 細 夢の地也
語りて古也 奇ハ怪也 つひにあるべきかとハ叶まし
こゝも 終情也 ちかの人をもとの人と浮しつゝ心とつきて
乃ゆく〳〵 物語ハうやうの心はせひとなるべし
蓮の花をもて遊ぶを見給へ 細 花蔵里也
叶ぬ〳〵ぬ事なやいと思ひみだれて 細 夜のうちまれ也
深草なるゆゑ也
わがとこのまゝ行るをもてあつかひやうにもてなす行るを
こゝひかるゝわかる年月はまゝてもなく〳〵はんの乃をさてもなく〳〵
過るほどもあるべくもひまなく 仏 さらくしくもなく又金
つまとせひ可給さ為なり給也 細 ひとゝ也
ふかくるほどもなくあれもとさめもとゝ為也
今をあのうちにたちやうあるほどを為みもてなす

ゆゑ〳〵ほどハ行ぬ事也 源氏花蔵里にはうひみ〳〵ちかとを
なをまれもを一時ハ云沖 ようかん 法中也 細 一宿〳〵ハ過也
いとゝもつまゝ〳〵あり〳〵ぬるゝ〳〵ん〳〵もの業をもてなす
〳〵ほどハ九帳をもてなされとも 仏 ほとゝ〳〵やうに行へし
仏 ほどもなくとゝまるほどハ〳〵ぬ事ハのこと
夫婦の業をもてなすとハ也 仏 源氏末下れをもてなす〳〵やり
又ほどなくあり仏 源氏末下れをもてなす〳〵やり
行つれと花蔵里ハちかひをもてなすのまゝ
まゝ也 細 為〳〵て花蔵里ハんまちかちひをもてなす
可給人也 源のもてなすまゝ〳〵ぬ
をもてなすハをたゝみ〳〵ぬほどもてなす
をもてなす 仏 年月内花蔵里ハちかをもてなす行ぬ
あをひとをめす人をとゝひをもてなす

花

花薮里みて年のうち淺花田のうら面のもんろうさぬと
櫻結うまとそ結也　毛ようとて下はかてくを結原
氏のうろう結つる紙をうろうと　細　そもろうの
時よりんてうを花よ詠也
ちうをもてく　宗盛也　うくをもる花うちも
やさしきうにあねと　於　鬢のほうくもる花とや
さしきと云也
うひうはててつうひ行へき　宗　面のはりひうくを
ひうう花ぬうはうをうくをうひうくを云蹄陶
はるに仰るる面也　於　はひのうくをとつてとを　女式ぬ
面へきうみてくはなをれとをちとやうみをしてつく
うひ行へくを原うを云也
我ぬうはうんんをんさあくあくはうさ面をかてんは

とそうをつくはいあをんうろうさんのはくをみてうをたうむ
をはうをまくうををはうをのんのはうをくみをまんうう
はをうのあうさとを
花薮里八宮新勾麗ようをんのうくはをと我
ぬうくはう　於　原氏のうをくしさうをを
んうをうさんのはうをみてく　於　原の仲中や
の結うを恨のさ面のをれをうをくをひはをうく
しさんを
はんうををとをうをくをみやうをりををりをうこ
をやうに　細　花薮里のはんを結をのようをてを結はを
しををうを花とを
をうを年れはをうをうをとをうをうをををひく
細　年内うをのはをうをうを

花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はめ給ひぬ　細さてこうしたとはあるこゝやうるとたる程
ちり　宗　物ごゝふまつこゝ行るやとは義宗は主宗のことやや
かゝてかんさゝ海ゝうと物ゝ物ゝよつまてはうゝも
ゝ　ゝ　細　ゝとはゝくかんゝとの源かんも　細　高物よゝてもん
ゝゝもも

かんもくし行まゝゝゝや　宗　源のゝやゝはんかゝうも
かくいとゝてゝてゝくかんもゝゝまゝとゝてゝるゝゝ
ゝまゝかく　ゝ源氏は浮心ゝとゝひ物ゝゝ主宗
の親ゝくまゝまさぬゝるゝに武勢の陽ゝ行ゝも
細　二義あり源氏の心ゝと云義ゝもあり物ゝも武勢乃ん
みくゝゝも源のゝ物ゝゝとはゝゝゝゝのやゝにゝ行ゝ
ゝゝ主宗の父ゝくいゝゝゝゝゝてゝくゝゝゝれても
ゝまゝゝの父ゝゝぬはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あやゝきゝうゝの物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いとをもたれうの雅をあつめ給へるを　仮　あさきをもたれたる
しめて聖とあつめ給へる也　細　明石姫君や
もろともに雅をあつめ給へる　宗　姫君と玉鬘と
もろともに聖とあつめ給へる也
あさきをもたれたる人なりとうちうちやすまし給へる
仮　紫上八歳にて光源氏に見そめ給へる也　されも玉鬘にもうち給へと
源氏乃殿也　あさきをもたれ給へる人なり　細　紫上
乃事なり
の殿ゝにまゐりたまへと宗の殿ゝ　宗　玉鬘の色を見給へる　細　同
内もあるとそうし言うたにうちはとたにはうしの殿ゝに
わうるとの殿ゝ　仮　紫上とあさきをもたれたる人と源氏乃の
殿ゝとうちあつめる人也と　細　紫上と桐壺の桐壺乃殿也
紫上をうちあつめる人也とうちとわる
てうきをもたれたる人也
ちたれわるとのゝ殿ゝとあうるるとみをもたれたる風
あまめゝを吹みかりて　細　明石上聴　ひとくしきを
のある也
物をうるとに宗さうくはさる　宗　ほうくの中みを宗
指をうるとの人也
内しきをもたれたる人やまうゝ給へるとのあさ
をみたるとしくうちしとをうるとちうくるとうはき
殿ゝ　さうくを　仮　ぬる石上のうち
うちうさのうくゝおうゝうちうを宗ほうりをかる
うんうちとさうとさうとめた
唐東京錦や唐東西京錦京錦もぐれ
宗ほとうう　花　唐東京錦菊藤四文白綾方一尺八寸

編白地錦四方二寸計裏薄芳平絹云縁也
[illegible] 唐東京と云所の織物也
居所所と云所[illegible]
易常の[illegible]也 東京錦とハ[illegible]唐錦也
[illegible]ある人ありきたる[illegible]
乃共[illegible]のしも也 薬[illegible]
物[illegible]
[illegible]ひ[illegible]の 沈薫[illegible]
[illegible]
[illegible]

これはうたうとめつらしやとみるまゝに　北　姫君　うち松の
を　奇　ものとうて
ほうこれもうるはしうもうたまもて　栗　古歌　ものとも
碧　よ　ものを　ものとも
めつらしやこれはうたうに　あつらひて　古菓　とうるうひ
北栗　ゆ　石上　奇　栗　上の　ほうこと　これはうたうに　ものとうて
ものうこれは　古菓　みて　ほう　ものとうて　ものあり　姫君　の
ものこれは　ものとうて　ものこと　ものとうて　ものあり　姫君　の
つう　ものこれは　ものあと　源氏　ほうたうて　ものうて　細　姫君　の　ものこと
よ　春　ものこれは　ものとうて　ものうて　古菓　ものとうて　姫君　の　ほうこと
奇　ものとうて　ものこれは　ものうて　ものとうて　ものうて　ものうて
ものうて

北　引歌　東歌　細　同

ものうて　ものとうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
梅　花　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
北　栗　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
八　姫君　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて
ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて　ものうて

まちうけぬとして出すさいはいに　於　源氏の君ゆかりの
　　ゆかりをたづねてこゝにあふやうなれとさらひ給ふるやを
いかゝとゝて　於　ゆかりの人なる物をとあまたをもとこゝにいかゝ
　　思ふまうけ給はとあまたをもとこゝにめしうけるも
さすがに思ふうしなれもてちかくこまやかをもてなしてめやすをなよ
ういあるをなれ人のうしなとをもとりやせ給ふを　源氏の尉
　　てのさはとへ通のむすめなれ給ふ除目とにあれうひやうしなる
ちうやなれ人のうしなとは思ふにとそ思ふにをもとうをとすなと
思ふとも
をうさにやうやうれる髪のうつくしうしさつくるほか
とにうすくきよらもとあるをあくさうひくをつくをを
　　なれ　於　昔をのをぬくをうをとを結ぶの梅のかをり枝よ
蝶（テウトリ）るのとひちうひたるさぬとをあくせてをまあるこう

　　若紫にはなれてあうそのをあるようをうきはをくれたる
　　ほさまを紙はめてつるるも
ほうをしをきをのはさうれをやとはくまくれをこるに
うをまをとを弱ぬ　於　源氏　四月一日和のことをれをと
　　まをとを人をにゆかりの方にとまをうををつるをとをろ
　　しうちをやうにはをのくくをてをつるをををを
をうトの和をまのおとをにをまをてをををるを
　　をををのはをををををふををを年のゆをれををまをうを
　　をををををれをいをてめをまををををを
　　ゆかりの人をとをうををををを

の行ふ　冥　冥のうせ　それ　ふるまひてめさるること也
わるうを行ふ　冥　曝（アラハ）す行ふ　細　石上の行ふ　原列行ふ也
おくしもあるまじ　冥　思ふ　あるうちに
うるうるもれる　細　石上の行ふ　あるうちに
あるうるもとのうるうるもとのうるうるもとのうるうる行ふ
みるもあるうるうるもとのうるうる
行ふるもあるうるうるもとのうるうる
うちう　冥　好物（ケヤケル）文選十二　者（ケヤキモノ）　冥　世の中のうるうる行ふ也
きやうるうは世にうるうるもとのうるうる
りうるうる也　細　おやうるうるもとのうるうる
きるもとのうるうるもとのうるうる
うるうるもとのうるうる　原のめ氏の行ふ也
うるうるもとのうるうる　冥　冥の行ふ

あやうるうるもとのうるうるもとのうるうる
しるもとのうるうる行ふ
月のうるうるもとのうるうる
ほるうるうる　原のうるうるもとのうるうる
たるもとのうるうる行ふ
さるもとのうるうる行ふ
月のうるうるもとのうるうる
うるうるもとのうるうる　原氏のうるうる
　　客人のうるうる
　　二月のうるうる　大切なる客人の
　　あやうるうる　冥　つるんしのうるうる河の行ふ
　　の使ちるうるうる客人とうるうる拓（テウジヤウ）して藤氏の一の
　　大臣の氏のうるうる行ふて朱雀の墓盤（タイハン）と氏院

[illegible]して[illegible]と用ゐる也 月卿の大臣は赤木黒柿の
机板(ツクエ)[illegible]と用ゐる也 [illegible]あり 鷹飼(タカカヒ)する[illegible]
源頼朝の客と云は正月二三日の間実白大臣乃至一客人
の[illegible]と来れると云ふ[illegible]
頼朝は[illegible]盤[illegible]とは不用[illegible]
信る楽郎(ラウフイ)[illegible]
[illegible]
客乃至執政乃至の[illegible]
[illegible]
の[illegible]
執政乃職[illegible]
細 [illegible]可知

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ことの度うちつてある梅よりて
ちぶ度ハ江へとさこ参りさせ
おとゝも時〳〵ちうちうに給る　ハ源氏も勝事し給也
さて事のもとゝつるいとなるつゝうめてたくやの
ほさきに説こあるを慶長書みて集者の梅者なると云
てゝあるを延喜式みても梅者又梅枝とうをつと俗云紀
みけ家者とし宮殿集ようさて者とゝみ者よつゝ
てゝあるとまつるまてもまつ乃始よ為生ましる者の元書弁
天皇内侍所同度と恐まゝされて温明殿と七ツの大殿
てあるあるとされるゝとゝ三条四条よ度殿りせりとゝある
やうきて三条四条合七ツを也同ツ字とてやうも也三
同四ツや或説みて三限四限也限とあまてゝうされて殿
者と殿ハ殿く殿るたる也秘説也とゝつり

事を法ひろまるとやされてゝとゝも
ゝとゝもまゝ者ちめちゝにるんうゝまけるかくゝ左原
る車代ゝ者とゝも　ハ宗　源氏ゝとうれゝとゝ法弱とゝ法
ハ者ゝるゝに無とまゝ〳〵ゝの者ちめ一限との也ゝうれを
殿とハふゝよみゝるとの也
ゝ　宗　六条院の町〳〵乃ゝうゝ
ゝちゝとゝ乃中代世界に者ゝ〳〵ひゝを作〳〵心ちもかくやゝを
也やゝ〳〵者ゝり　ハ上の河よゝ玄のゝゝうゝとハゝ者る殿乃ハ
ゝとゝゝうゝゝゝの殿ゝうゝゝゝゝ物ゝてゝゝ中の殿ゆゝ殿ゝ
ゝゝの花ゝてゝゝゝゝ

ときこゆ三のみこ仁徳養女に下ふ下生の御也於蓮花
中二位殿十二大納言 親経下ふ下生 六条院乃中さんぐ
しまうて東院乃くゝ人とのゆゑ乃ふ末橋乃帳乃
とのゝ也源氏と仁ふ乃ふとゝ人ゝ乃ゝ人ゝ乃ゝ人ゝ仏
仁養せぬるゝとはゝゝゝゝ人ゝ乃まゝに源氏ゝ乃ゝ
ゆゑとゝ人ゝ乃ゝ人ゝ生仏ゝ乃ゝ
つゝゝゝゝゝゝ下ふ下まゝに乃也仁度乃ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ乃ゝ八橋蓮乃中仁勅とゝ乃ゝ仁ゝ不
ゝゝゝゝゝゝゝゝ三ふゝゝゝゝゝ
まゝて東乃院ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てはまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世勢のうつりかはりめでたきためしとも
細 家乃祖と三院まゐりつかうまつりし
事乃東三条と世勢のうつりかはるこそ
さてうしきなりけるとて
笑 源氏東院へ
いまはとてうつりゐたまひ
人のほどあまたうつりゐ
ぬさほどにうつりとも
人めのかすかなりうつ
色ちりもてゆくしはわ
細 末摘花人うまれ
まして滝のうつりゐ
いとわびしとぞ
細 末摘花ハ人めもかるるにたとへ
細 ちとろ
細 ゆく

しの一院乃うまれ給しとき給ひやおとろへた
ゆくも 古 落滝津瀑の如上年ハ
ふるうきもちるもの
にうるはく髮とゆ
ゝのもしもあるも
字とりもて髮にな
るとも光ハ滝よりとこ
まかみもむらひ行
行とあも
柳ハまだそもさまし
ゐ人うつるへし
と落られるへ人
とあふこそ
細 源氏ゆ里結ゐまゐゆくて向
笑 前の
細 ゆく

きぬとりれば付ひたる柳色と云てせばるる也
ちとをすくとりきこい袴うの 孔 掻練ハうもとおのとるとある
きぬをとりうしなれとりむ物やどうひくしくとりなる
わこいさやくさあるん也
さふくしをとるとたるひとうさ 芋 さやうにるとうこと
とーやりてうあるぬたちまるや 細 はくこ多るる也
ぐうとるとものうちきこさ行るいとさむきに公るー
ひ 光をとうーぬとるとものみやあるこしる也 元 行色
とをんこはかりうるー
くさひうちきるとをいうふしるにうあんはを
ちのをとうるとはこみをしきるまーくをやうるに
ひうちきいうはるあるものたるうひとんめーてさひをとの
ちひうーうー 元 ひうちきをとうきるれとうる例乃

うつかみてくきを行るひまるやたる源氏のとうる行るふ
袴を柳成へ一次にうるきうるるを一をハみきぬのかや
さうれのうちさとうを表をるるをのるやを行ひのるれを
草のうきひうきぬとふつるるやうと 芋 うちきいうち
あるこきぬをひとへをうあるハきあのトにうあーはをる也
かさひハみをぬるとあるまうきめるうとやて 細 うあ
ようをる行也
行幸みをあーはうちうあをうれるて 宋 源氏行ハ雅却意
とも 細 源の行幸也
ちとうーはうひるるて行ーの中ーくあ行
とはーーうーはは 孔 源氏の行ーうるを結白うーく
はほさんとて行幸也中ーくあはさーとはりーーは
とうを末橋ハ源氏とうちうをんたうひ行ーはれ

とくのほんのうとてしさたうちとを行義なるとも
元義は源氏と対面の時本下とをてうんと源氏
のうちとしのを行へハうれとさてあるすしたに
月さうと来橋ハ来下とそたちへのをしまてうたにうう
てたのをあくハうれて源氏の元ちとちくたに九種と
引箔なるとをくくあいさしとをとあるも四さ
もてちのんあるをとくくのようれたる
物なへ

とをうくあそれまうたほんのほとあくしさのようち
うをとのをやくなるを沙ほうれまう
細
とうをとくたを源と海汗成義なるをも
くなるかくうをとくしてをくくのへ句くをいとわくくうを
きくのほさ海とあほせも　於合とをとくなる中ををみを

未橋ハ宮なれハとなるとを外てありひ行とも
義ふ義をたにしてハやとほんふあなるをありうたそう
法ふをたるとをいとさををたにうちわるをきつかくひ安
をなるをうくひなるくをを　於宗源氏のをちなるをハう
はのるまりたとあほをハほんくめなをうくたとも
はううをのうをとうをうちうを四つをなりやかくうろ
やをたほをまるハををうちうをたるさ海をうくをうる
をそうをれうをへうくうはくうろひあるほうをひハ　於源氏
のを綱也うくをうをへあるやを御なるをへくくし
たるほうをんやを　於并たうちくのをうをうさを
海ほさやうあうをたとを
あひをくうをとをのを行へを　於宗うをほくらをうをとを
をくほくうを指御ハ新ををうたほうとも

こちらくしをさしてふうちうとくひ行てきいつこのあさちの
えの所あれ〳〵ひ〳〵ゐるとてさんぬきくえぬの後〳〵てちん
宗こちらくと笑ひ也　元ちらくしをハさきのをそま
とあり云言の為てれハこと〳〵きと云詞也
ひとしさぬとかへとてまこ〳〵後さしく作るやこのこ行ちハ
原宗　酩酊ハ酒宴也　酩酊ハ酒宴也
とうとこてこて歌め〳〵物もこて行こあとも云詞也
後さのくハこさぬとこ行しと酩酊ハあさるとれとまろ
と源氏ま後行也
いとこれあるこさ後せこやこあるうちと　宗　源氏の仏也ハさ
ひこと鼻あるれんとやせこやこハ乞ひ重ハうちるへし
仏これこ〳〵ハこひあるこあまるとうちとをもとれたるうや
ひ何せと　於　仏これこ〳〵ハ未橋のこひ也仏〳〵思こひとあ

ひのまくにつをとうれ仏〳〵ハこ也されとこうちく
ハこさちこ物ちとあるひ
あるとの仏也
ちくこくハいとまあふきもちくれへふくあるこ　於宗源氏
と未橋ハ所ハくハ後ま
むこちこ後ハ仏とやきさもくやハ木男ハ神也
ひとこぬハいとこ　於　宗　実桜の名後ハこれこくこ也
源の詞
山ふのこれ〳〵後ま山ふくあへちん　於　蓑ハ後ま
こちこ後のこ也山伏とハあこちとこ行てこうこ也加
しこぬとひこちこ行てハふあひこくこんとのこひとあへ
ちんとハこちこ元ハちうちんと云詞也　野同　山伏とハせと
遊て野こ山こあひとこ也　細　あへちんハ面てんと也

山ぶしと野ぶしとかてゆるしてはこゝろ[illegible]
[illegible]
自 山里はまつ[illegible]
[illegible]
[illegible]

にてうつのつゆあるゝぬれたるそでの袖よ来橋乃鼻れ
ことを法鼻れとたつるとあるみもまさるまゝ色なる
やうなるみとあり家ともその鼻れん下にあり法くゝの
はゝあるゝぬれとみるうれとハ心うり 細 と細と位行とあ
梅也元ハ名梅也下紅色常陸の国紅色
紅色ところ法人とたゝまるるとなるハ法りあんう
水橋の家鼻れしとゝ也ゆめとあるなりぬとも 枝 ハ返
ちとなれ紅とゝうり
うらせこうあるゝ家みを法ゝのうれ行うり 枝 下の袖よ松う
うゝ法とゝひ出をるとハ法ゝ家乃袖のつゝ面白とも
元 ちるゝゝさぬのかゝみをうれるも
うをつりたるゝ法みもあゝ法かゝやたつりのまゝに色
あ ものてひゝきとたもとうハ紅とめあるゝ法ゝとも

仏ゝうとに法ゝ法をなりてあるひ法とめあるゝ法家に
乃ゝてゝさやうほとをのうゝるとゝうれゝゝたるあのゝくるを
もわゝゝあふあゝめゝゝくゝるゝと紅ゝをありゝさみあるゝ乃
をゝひあり 細 紅あるすまゝひゝゝさ法也
法ゝとみひの九法紅ゝゝ人ゝ乃ゝゝにゝゝあゝれて
元 出家の人乃末下れゝゝひゝゝ法 乃ゝニ 法と乃ゝ也ゝうれ世ゝのゝる
ゝゝゝゝゝゝゝゝさぬゝとあゝとみ紅とゝうゝよかゝゝひゝれハあ
下れゝとあるゝゝやゝう也神ゝゝゝゝゝゝゝゝとあゝと
ゝみゝゝゝゝゝれ法ゝゝゝゝゝゝとゝゝゝゝゝれ
ゝゝ色ゝとも也ゝハ人ゝゝゝあゝれて行世ゝのゝ法也
神ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれハゝゝ
ゝゝ法ゝひゝく 細 さぬゝゝゝゝゝの河ゝ法ゝゝうれて
ゝゝ

松うら〻潟とをるうにをひくてやこぬへうり者る　於京都の
尼は如何へしをひそるれらるやを　細引言同
はなを
者に沒松うら〻潟をてこれハむへんあるけく〻を信者り
伝言ハ奥州の尼は如何へく信行〻ゐとあるへの
力〻くよめるを

昔よりをとゝうゝけるを法華経をうれさすにかをうとれをうひを
ををのをまうゝうゝ者るをよをとの給ふ　於京都ハ古うゝ和歌
人をやをうれとをもかくををうるとのをうひををしと源氏の給
給ふ者をを給の者るを者ゝをひををうゝ給かゝにをのを宮
えををするゝををんあをくハ給思給へをゝを信者るを宮
ゆ　於京都ハ給ふをうに給のををハやをうの者給ふをそ
まをを源氏を奥者ゝををんを思ををゝをゝしゝ給ふやうを
思をあをくハ思ををゝをうをとの給を

細源氏を後ハ思ひをゝをををとを
はををきれゝくかををねゝく給まをとゝ給ををうのををひををと伝
にゝををまをを宮者をををうれ給ふをををゝをを
於京源氏の祖を中河の帝へ者を遠ををにまを給ゝゝ
て京都ゆへを法出をゝををはををふををををゝをゝ
ひを給ふをめをゝをれをを者ををををををを給
へををゝゝく給をゆをゝををを給をゝをを宮
ゆをゝををををゝををれをゝを給をゝをを給
給を給を者ハ源氏の祖を仏をゝをを給を給
をを給ふ給ハ源氏を給ゝをを給ハ羅陳（ナイセツ）と仏をゝをを給
を給ふ給を源氏を給ゝをの羅陳（ナイセツ）と仏をゝをを給
を給ふ給ハ源氏を給ゝをの羅陳（ナイセツ）と仏をゝをを給
ハ給ひを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給
来給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給
細源の祖を中河の帝をゝん
給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給ゝを給

梅の花をうるさくみるもあるべしとも
かくいとをかしみもあるべきものをとおもはるるをあ
らべやとてもん思ふとの給へば　女宮　源氏の物語世中八紙にま
ゐるをぬぎうるやそんとてもあるべきぬとぞいふ宮
もうやうに宮にかの給へんといひうるを給へ紙をもて
かくてそうひくもあるべきそれをやさうもそれをえ
わかせぬまに宮にいとせ給へるをせのちさめる
ことをやいかゝ給へぬるやはあしとも　元　源氏ろんてん
よのはひをうるもまゝ紙をるとをそのむかき
人のうるを思うをぬ紙をるとはせのはるをめるをもの
らぬとをのはもをそのの給へ下のうるあるまゝうし
せのあるとをとさて給へるやそうる月給へるをぬて
返紙をうるをうしたりしるをやの給へてうるの給へと尼

元のんふをひ紙をるも
かのあるをもをうるをのるををとう給へるあんをう
やそうるをく　女宮　蜻蛉の紙をるを作りしたるる
と源氏の宮給へ紙のめ給へをうるくそも
侍　宮蜻蛉の紙やまるる紙をるうるくにひゝゆに尾
をるをやと源のをうるをうをの給へるるを思も
うるをるをさを紙とはるんゝをそうるるはのむをひを
ゐるくみるはるんとそをまをとにうるをるをぬ　女宮　はやうに思
ひをうをぬ紙はるをの紙をるをそのあるのむをひ
をれはかをむをひをにうはるんとも上の紙は
はをうゝ給へひゝ世のむをひと源氏のの給へ八宮にを
蜻蛉のをひとをるん給へ紙はるをゝ
いをゝををとも紙をるををうををるををかくをてん

なれあるとくわほとくもかんたるものかくおほさるれと
そうれきこの人とのおひろくろくもあくもとおほくるのもて
とのはなしとしく給く　注宗　源氏の法印也　三宝蜂八苦ろとて
ろくろくれんのとハ結ぶ給もまりてあれハ行もろ区
ゆめとも　源氏いとこ法印ろうれとこもとろれきゆ
とこうえの給ろて苦今れ地獄ろとし給とも
ひそうるとろてふひふあまうしやあること万やり給ふう
やうみてこもはうをにくくれるる　注　ほるさハ未橋乃如地空
蟬のちとく未橋のまうくまをうふ万やり給とも人を
ふるもうしぬ物とも　細　常陸元の光頼との母とも
あまうしやも
人くあるる　注宗　めの氏のさ風ともみくく東院又源氏を
英雄とてあるくくれ物とも　義経の五位なるとも

をを中　如くくくとも　細　人くくの氏のもも多也
みるまうのそれわくくく給て　宗　東院乃人くくと悪源氏
のさ信給也
物ものくるさ日数はるるわるもくくあれとんのうちハわくる
うくるもん兵うくるとあるみちのわくまのこくそうろうを
まいのちうまくぬるとうくくの給　注宗　源氏の東院乃
人くくの給何也　三人法印ともとも法印ろハ法宗
ともさうとあるくく限あるはいの別くそ心ものきれい
うに法宗ともろうまハうなるれうとも九くく命をもう
ぬものちるやちるくくまいの給也　細　引高同
引高
院ある別のこくそうれ御を命ものくくに法くくぬも
うの法ともとも用ものくくにつきてはそれとものくくる
細　源のもて給うぬとも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

もてわたる色とれば弥とるると今のかたちにはあらぬも元
名流同之　弄　踏弄のかたちひく物くるるとあく
物と弥踏よりとかくるひとつの弥飯弥と云もてなく踏
高ふと家よりもてを物流あり　ちる物をは彈
ちるへきに初んこるもうしとも　細　おなじ八ち伝伎よ
中ちう廿二人侍者ひうはくひあるとく飯弥と換
もるも男弥と飯弥と八同物也人の飯と今に用とるる和
みくいるふもわくと物ちあも　八の弥也　七倍乃弥よ
もやうやと云八武義元と云　もやうはうもと
ちうつくろあも　柱ち　羨持奴
白飯馬青鼠と清くまる
まんあるとうるとはくにはくとにるうくてはくく
もてもやさを弥ちをずさまくき曉月和に雪やうく
ありつむ物ちくく吹あるうくものもさまくもとあ

あるはとに　宗　和とやうくはるくさもれ八ち弥なるうくき
と一段本毛乃ちふ六条流ちく毛飯弥乃くくあり
ちひ行とも
はとうちのちへくめるにちくはものとあひあみのうるる
うくみある　乃宗　あとくこのうるれさあるよちるき下襲と
うさあるくく男踏弄乃河のはくまま辰裝束と毛弥
毛流ちんくくるる高ちんく下出毛とくるもあとるもの
袍と鎧甲の袍ともうるる服あきのうへ乃さあなるうう
ちくくは下ちの乃うくはくてはくうちうる和也あ
糸一部也賀斗と伐持代二人そ位袍とるもるし
乃くくうう白殺八兼一人まくて毛とは也兼者八緑韃と
ちくくそうう同一部ちへくあるとに敢安ちるとにちれ
てえあひかうくもちんくあるも　細　ちるはくとうる和

六位の中にあり麹塵の袍やとりきて下襲也
うきしれてさはやかひもちなれぬれと　於　殿上の人の禄也
禁中の給寮（りやう）にて内侍所の人々とう揺をたにへくくた
ちあつまりてとりるやうにて殿上の人の禄の綿を給
りて葵遊といふ　此禁中にくの宮八十八家侍
みて是を作法と源氏にあると後帰付とりかへ〳〵殿上人
〳〵綿花とかく冠の額にさすも是言申子
ふるしみやゆもしろくんゆきさ命のあり給ふ　来　六家侍
の男子参りて而白ぬへし
殿の中なるの花四の大殿に参りてしたしくとれてやや
もくくとれやうちはのくをかりよゆきやらりてそころ
きひきたん　於中ねは夕方也　大殿の花は四大殿の息女中納
言の人生女方をとりあつめて殿上の人数とりくらと

延長七年　殿上に左中将伊衡朝臣右中
将実頼右の方に分て左右の方にかきて
して綿の番の〳〵一院より殿と机をもて〳〵
てはるを番人の一十五人方にかき
くくに番と云也　細　夕方相撲二人方也
行門うひくかよりあるもとくくの
於宗　行河　信濃国　行河のもとくくの
あるやくれるのふ二位ちはあるやとくくのつめ
をいとりてやめくくとくくるとくくるとくくるて三くかくれるとくくの番の
もとくくとくれまつ神也　神也　神也とくくる番也
和神を祭る也
もつもくくとくめかくくくんてそこに行くくれ　細　於八盃方也
うきとめくくくくとも

延長七年

はるくくいつ迄とくおとこぬ神ともこうれ出てるこち
ゝさまのをこのひるとをはのく宮に　於六条後の法
くくの神くちも毎度諸寺乃神はとゝひあゝり
きるとゝ神はをとゝひるものあるゝみやとゝうちちたき
やハ神のつてたるさ海ちとくしき神とはめていつり
まゝのつきゝちいてに神ある震のうちとゝ乃ゝ出るあゝ
しるゝ忘ゆくゝ乃ゝ乃みそまゝける　宗野山の花乃神は震乃
まゝたちゝ出るゝに海の神はとゝをとゝへあつり
ゝるはうゝうゝみのゝをちゝ　花　高中とゝいゝ
とゝをくゝをゝるくゝみゝるとゝろきゝ夜ゝくゝ見ゝとゝる義
人ゝゝるゝ見ゝとゝくゝ張六位の業ゝ乃ゝちゝ見ゝと
見ゝをかゝうゝゝきゝ神八神乃面ゝとゝうゝあるゝゝみゝ
たゝりはゝよゝんゝをゝれぬゝをゝるゝにゝりてせゝる

迷あるゝやゝをゝるゝをゝ別ゝをゝるゝにゝのゝありゝゝ所神
同之　細　花別勅おゝあゝ和ゝゝゝ海ゝきゝをゝる也和
云為帽ゝゝるゝとゝたゝるゝゝ
ゝとゝあゝ花のゝゝをゝりゝきゝ　於　神ゝをゝとゝゝ見ゝくゝしゝゝゝ
ゝるゝきゝ海ゝ　花　西宮云諸寺立沸(ヲ)弟(コトフキ)麦(コトフキ)詞
海ゝあ花ゝゝゝるゝゝをゝゝ
くゝゝゝ

いつくしくもあひしつるかひなくもあるかな

中将乃殿　於　源氏の宮の御方　夕雾の御ことを兵部少将

よりとくもぬるかなこゝろ　細　源氏の御方　夕雾の御ことを兵部少将

人也　四大臣乃息也　いうとくもぬるかなこゝろ　細　源氏の御方　夕雾の御ことを

弁少将　細　右梅大臣也　色ゝ紅也　夕雾乃　麗　医

ての給也

いつくしくもあるかなこゝろ　細　源氏の御方　夕雾の御ことを

はらからもんなるをたちあるすちをは　細　源氏の御方　夕雾の御ことを

まちうけんう　於　ろ　是　ハ　ち　ゆ　ま　ち　ま　ち　ま　ち

うるはしくとりなしたるものなれば物もの花やかなるを相応として
うんじたるこゝろばへなり　乃　光源氏のく
ちすさびなる踏歌の曲信濃の国踏歌第一人乃
立さまはいとゆゑある紙屋氏の口すさびの詞也
へくらゐにはいとひ給へるつゐでに　乃　光源氏の思人
達こゝろざしはわるからぬものゆゑ三条院へよ
そうはいとひ給へるものゆゑ　細　はうさくこうりうの詞
ぬとうらうてこゝにこゝろざしつとひ給へるはいつれも
ありあふ遣乃やうにゆゑもたくみやうの詞に
てみとゝ公ぬへ〜は女楽乃ゆゑ花ゐるゆゑ女楽あるへき
事ゝあるさまれとゝあ〜まり〜ゝるゝゝるの
はうゝゝを見ゝゝはゝゝ行はゝゝに蓮中ねり冷
泉院の詞の源氏女楽乃ゆゑ必あるへき必あると

しゝゝ分ゝたゝうはゝゝひねゝうのあゝひゝきゝうゝをゝて乃
ゝゝゝあるゝゝゝ公ぬへきゝ
詞の言ゝ乃ゝてゝゝれ　家　女楽ゝとゝゝ当て古行ゝ文の古詞也
きくしのこゝろんあるへしとの詞くに　乃　男踏歌乃饗宴
八三月の間より接負（セツブ）あるゝゝゝゝの結とゝゝ西宮抄
に乃ゝたゝうされ八月重陽ゝゝゝゝ私乃饗宴八六条
院へはゝゝくはゝゝひ給はゝくに女楽あるへゝ事ゝあ
ゝ内ゝゝゝゝゝ饗ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝも仕相事ゝ当ゝ踏歌乃ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝて言ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
下に言ゝゝゝゝ細　踏歌元饗宴ゝ摸して源の詞也
はゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　河　管絃の黙（ダマリ）詞（ヒ）

又紙子なかの義也琵琶袋 面紫武赤色 裏唐綾 筆袋 錦二福
和琴袋 笛袋 笙袋 笛袋 文庫 同 裏色
笛ことの付き笙 笛 篳篥 笛の中に篠へ琵琶とりへ
ゐもし十三絃のようきくに和琴琵琶まろひさおさみる
琵琶の中に入也 筆の袋 ふくろ 縁二ちくわりに
てくしはきて琴とつくりて四ちくみくゆいあり 筆
ようとなまりたるほとハ一ちくろくとくとくるくひもの
四さくとちんさくにより 琴琵琶の袋 琴 縁
八度 縁ちくとふくく双六の袋のやうにたくくを袋
してゆやくくくくとくくくく